

この子を産んでよかったの。女性（40代）は長男が不登校になった時、自分を責めた。女性は長男に学校に行ってもらって、車で送迎し、どうにか登校させていた。だが、やがて長男は車から出られなくなり、そうしたことを繰り返すうち、家の玄関からも出られなくなった。女性は長男を無理に登校させない選択をしたが、長男は壁に頭をぶつけるなど自傷行為を始めた。「死にたい」「生まれてこなければよかった」「どうして俺を産んだんだよ！」毎日のように大声で叫び、女性に詰め寄った。2階のベランダから飛び降りようとしたこともあった。長男が苦しむ姿を見るうち、女性は自分を責めるようになった。

■ 追い詰められていた 親になってよかったのか、この子を産まなければこの子は苦しまずに済んだのでは……。自問自答を繰り返した。

不登校の子を持つ親は、社会的に追い詰められ、孤独を感じている。不登校の子を現在または過去に持つ保護者を対象に不登校に関するアンケートをネットで実施した際の回答には、「自分を責めた」「子育てに自信がなくなった」「孤独感・孤立感を覚えた」「落ち込んだ、消えてしまいたいと思った」など、不登校の子の親の心身の負担が大きいことがうかがえる。

別の女性（40代）は、「学校に欠席の電話連絡をするのが苦しかった」と打ち明ける。2人のこどもが長年不登校になっている。当初、学校への連絡は「登校できる日だけ」でよかった。それが2年前、校長が代わったのを機に、「欠席する日」は学校に電話連絡するよう求められた。朝、職員室に電話をすると、事情を知らない教師には欠席の理由を説明しなければいけない。そのうち「不登校」と言うのがつらくなった。「子どもが学校に行けないのは決して悪いことではないとわかっているけど、『不

登校』と口に出すと胸にグサツときて、うちの子は学校に行けていないんだと再認識させられるんです」 だが、そのつらさを教師はわかってくれない。女性は人間不信に陥り、他人と会話をするのも怖くなり、外出できなくなった。翌朝の電話を考えると、夜は寝付けずつらかった。家で暗い顔をしていると、子どもが敏感に察知し、気を使ってくるようになった。「これではいけない」と思い、気持ちを切り替え落ち着いていったという。